

## 学会会場運営の顛末

佐藤廉也

報告者の実行委員としての仕事分担は主として会場設営のほか、学生をはじめとする現場協力者のまとめ役であった。ここでは大会の直前と当日に手伝ってくださった裏方の方々の仕事を中心に報告したい。とは言え、「組織と運営」報告にもある通り、当時の事務局周辺の動きはあまりに複雑で、各自の目先の仕事に忙殺されるあまり全体を見渡すような位置には誰もとうてい立ち得ていなかったように思う。よってここでも客観的に振り返ることは最初からあきらめ、報告者の頼りない記憶に基づいての断片的な回想となっていることをお許しいただきたい。(申し訳ないが以下多くの箇所敬称を略させていただきます。)

学会当日の実働部隊として名乗りをあげて下さったのは、京都大学アフリカ地域研究資料センターの教官(池野旬・坂坂実千代・水野一晴)と院生(桐山睦子・森下敬子)、京都大学大学院人間・環境学研究科文化人類学研究室の院生(板坂真季・岩谷洋史・見目佳寿子)、および同大学学部生でフィールドワーク研究会を中心とする人々(遠藤環・小林英仁・左古将規・高橋淳一・辻清人・手島健介・土井千春・内藤尚志・林範彦・福井路子・松村圭一郎・望月幸治・安野正樹)、そして重田さんと、重田研究室の豊泉富士美さんの人望によって集まった同志社女子大学・同志社大学の学部学生の人々(荒木裕一・井伊あずさ・飯田明代・伊藤雅美・片岡智子・河村桃子・高嶋愛弓・富岡正臣・尼寺真裕子・服部聡子・前川真理子・松永栄司・森口幸子・若松栄治・和田あづみ・渡辺麻衣子)などである。

同志社の人々をのぞけば大半は完全なボランティアで、自らがエチオピア研究に直接関係しないにもかかわらず、厚い義侠心と旺盛な好奇心で会場を支えてくれたのである。これらの人々に期待される仕事は主にセッション会場の事務(タイムキーパー・スライド・マイクなど)や受付のほか、インフォメーション係やティー・コーヒー、ランチサービスの準備などだった。また池野さんと水野さんには、学会の最初と最後に行われたパーティーの目配りをしていただいた。

各自の空き時間と学会のスケジュールをにらみながら可能な限り適材適所に仕事を入れていくわけだが、二つの会場は離れており、しかもその中でいくつものセッションが同時に進行していくため、どちらにどれだけ人・モノを集めたらいいのか、予測が難しい。国際学会など参加するのも初めての上、マニュアルも何もない上での仕事であったから、当日の進行を見ながら現場で即座の判断をしていかざるを得ない場面が多々あった。その上、あれだけ一年以上も前からさまざまの人々がかけずり回ったにもかかわらず、赤字が危惧される状況であったため、見込み違いで無駄を出さないように気を配ることも要求された。当然のことながら一人で会場の全責任など持つことはできない。従って、これらの実際の仕事は実行委員の縄田浩志・藤本武との三人四脚であった。もちろん、これらの仕事の大半は事務局の動きと密接にリンクしているため、游珮芸・多治見陽子・沼田貴子・阪妹子・豊泉富士美はいわば運命共同体であった。

プログラムが直前まで二転三転したため会場設定には苦慮したが、個々のセッション会場の進行については、実際に動き出してみるとほとんど問題はなかったように思われる。会場がフルに使われる日などは人員不足が危ぶまれたが、あらかじめ決められた持ち場を責任を持ってこなしてくれたため、穴があくことはなかった。

準備段階で悩んだのはブレイクや昼食のことなどである。ホテルサンフラワー京都会場に関しては、セッション当日の会議時間内にホテル内の喫茶店を貸し切りにしてティー・コーヒーを提供してもらうことにした。京都市国際交流会館の場合、館内二カ所のスペースで飲料と菓子をサービスしたものの、会場によってブレイクのためのスペースがとりづらく、またセッション会場どうしが互いに離れていることも参加者に不便を感じさせることになった。後から振り返ると、国際交流会館は大きなセッションの開催のみに絞った方がよかったと思われる。

昼食については、両会場とも近くに適当な食堂がないため悩まされた。ミシガンの大会ではブレイク



【写真】 ホテルサンフラワーのロビーに設けられたインフォメーション・デスク。



【写真】 発表用スライド受け付け。ホテルサンフラワー。

時に提供された菓子などを昼食代わりにしていた人も多いと聞いて、できるだけ安価な昼食を提供したいと思ったのである。この件に関しては藤本が骨を折ってくれ、サンフラワーホテルでパンとミルクの昼食セットを用意してもらった。この試みは当たったとはいえないが、実際にはエチオピア人どうして適当な食事の場所を発掘していたようで、心配は杞憂だったのだろう。大会直前に準備作業に没頭していて、徹夜明けの早朝にふと大学の窓から東大路通りを見おろすと、エチオピア人が数人連れだって歩くのが見えたりするにつけ、好奇心の強い彼らは存分に京都を楽しんでいるのだと思ったものである。

インフォメーション・デスクについては、こちらはお願ひしたのみでまかせっきりになってしまったが、事前に沼田さんがいろいろ考えてくれて、坂

坂さんや、フィールド研の手島君、同志社の飯田さん、伊藤さんなどが活躍してくれたようである。

京大の人は学生・教官にかかわらず、みなボランティアで、アフリカ研究者であるとか、福井研の学生であるとかのよしみで積極的に協力してくれた。こちらが混乱していたせいで仕事の内容に関して適切な説明ができたとはとてもいえないにもかかわらず、皆機転をよくきかせて対処しエチオピアの人たちに頼りにされていたのを見て頭が下がった。根っからのフィールドワーカーである。また「フィールドワーク研究会」の学生たちは、学会と絡むイベントであるエチオピア映画祭との掛け持ちで、忙しいなか積極的に仕事を手伝ってくれた。ことに佐古・松村の準備段階からの活躍ぶりはすばらしかった。

同志社の人々は前述のように豊泉さんと重田さんが集めてくれた。帰国子女が中心のため皆英語が堪能で、こちらの準備がかなりいい加減だったにもかかわらず、それぞれ持ち場を危なげなくこなしてくれた。何より励みになったのは、単なるアルバイトとしてだけでなく、仕事を楽しんでくれた学生が少なからずいたことである。荒木君や若松君などは夜もホテルの事務局部屋に残っては、学会で多くのエチオピア人と

接したことの新鮮な気持ちを語ってくれたが、彼らの元気さは明日の仕事の段取りで頭が白くなりかけている報告者の気持ちを支えてくれたものだ。もと人気予備校講師の水野さんは、学生の相手は慣れているとばかりに事務局部屋でも学生の人気を集めて、雰囲気や和らげてくれた。こういう人が中に一人でもいてくれるとありがたいものである。期間中疲れがたまったせいか、学会終了後まもなく肝炎で入院されたようだ。

ちなみに報告者は自分の発表原稿の作成をセッションの前夜遅くにホテルから研究室に帰ってはじめて（ほとんどやっつけばちで）とりかかったが、事務局の人々は皆似たような状態だったようである。ことに縄田・藤本はこのような状況にもかかわらず参加者の興味を引く発表をしていたようだ。期間中縄田は学生や海外からの参加者の動きを実によく観



【写真】 サヨナラ・パーティーで、実行委員会と参加者からの謝辞を受ける事務局の女性たち。左より、沼田貴子さん、阪妹子さん、游 珮芸さん、多治見陽子さん、豊泉富士美さん。

察していて、瞬時に的確な助言や指示をだすのには、舌を巻いた。高校時代アメフトをやっていたというのは、なるほどと頷けた。エチオピア滞在の長い藤本は、エチオピア人参加者から引っ張りだこで、彼らから寄せられる実に細かい注文（体の不調から、部屋割りの不満、買い物相談まで）に粘り強く答えていた。エチオピアの人々の多くが誰よりもまず彼に頼み事をするのは、藤本の人徳といえる。

すべての期待に答えるのには限界はあるが、とにかく日本へ来たことの満足を感じてもらうために、誠意をもってあたる姿勢を保とうというのが、縄田・藤本と事前に何度も申し合わせたことだった。結果的に、初めて日本を訪れた多くのエチオピア人が滞在中不満を全く感じなかったかは自信がないが、少なくとも満足してくれた人は多かったと思っている。

いつだったか、深夜に見知らぬ人が年配のエチオピア人参加者をホテルまで送ってきて下さったことがあった。近くの食堂に夕食をとりに行ったところ、ちょうど閉店時だったが、店員さんが自宅に連れて行って家庭料理をごちそうして下さったのである。その方は名も言わずにすぐに帰っていったが、

年配のエチオピア人はその後も「最高の思い出ができた」と喜んでいて。自分も海外に出かけたとき、行く先々で同じような親切を受けたことを思い出した。

縄田の言うとおりの、あのような緊急の場では一人一人の特徴がとてもよく表れるが、とりわけ一人一人の性格のタフな面が印象に残った。遊さんはずっと目が充血していて、心配していた通り病院行きとなったが、それにしてもよく最後まで乗り切ったものだと思う。多治見さんも足の怪我（おそらく疲れが祟ったせいだろう）をひきずりながら最後まで元気だったし、沼田・阪さんの器用さに助けられたことも数しれない。豊泉さんの絶大な活躍ぶりは関係者皆の知るところである。紙数が限られていても書ききれないが、終わった今となっては皆かつての戦友のような気持ちである。

（さとう れんや 実行委員会委員  
京都大学総合博物館）